【新刊紹介】

Karin Labitzke 他編著：Climatology of the Stratosphere in the Northern Hemisphere (Meteorologische Abhandlungen, Band 100/Heft 4, 5, 1972. Freien Universität Berlin)

1957～58年の IGY（国際地球観測年）以後，西ドイツのベルリン自由大学から発行され続けている一連の天気図が1960年代の成層圏循環の研究に対して非常に大きな貢献をしてきたことは良く知られている．日本においても長期予報関係をはじめこの天気図・資料の恩恵を受けた人は少なくない．一大学の気象学教室からこのような大きな仕事が生まれたのは，ひとえに成層圏突然昇温現象の発見者でもある故 Richard Scherhag 教授の天気図に対する深い愛着とすぐれた指導力の結果であったといえよう．

このたび，ベルリン自由大学における過去十数年間の天気図解析の集大成ともいうべき資料が，Scherhag 教授の学風をもっとも良く受け継いでいるといわれる Karin Labitzke 博士を中心にまとめられ「北半球成層圏の気候」と題して発刊された．内容は2部に分けられ，第1部は主として 100, 50, 30, 10 mb レベルの高度と気温，第2部は同レベルの地衡風速をまとめてある．第1部第2部とも前半は季節別（Jan., April, July, Oct.）の平均および偏差図，子午面および緯度圏に沿う垂直断面図を中心とし，それらはさらに異常高温年，異常低温年にも分類されている．後半は各レベル各気象要素の緯度（5度毎）経度（10度毎）格子点値の統計を計算機プリントアウトの形で数表にまとめてある．全体で図，数表が各々約200枚にわたる労作である．これらの統計作業のある部分は，Labitzke 女史が1970～71年にアメリカの大気科学研究センター（NCAR）滞在中に H. van Loon, R.L. Jenne 氏らの協力を得てなされたものであり，同時期 NCAR で同じグループに属していた筆者（廣田）にとって印象深い図がたくさんある．

従来，climatology の名で引用されている全半球的な風や気温の分布図は，皆それぞれ data source，統計期間などが異るために相互にかなりの差異が見られ，比較上いろいろ不都合な点も多かったが，このたびの統計は質量ともに北半球成層圏の決定版に近い standard を与えるものとして高く評価されよう．成層圏のみならず対流圏をも含めて，たとえば大気大循環数値実験の verification や個別的解析の reference として，あるいは現実大気の姿を認識させる教材としてなど，今後さまざまな活用が期待される．

（廣田　勇）

気象学会および関連学会行事予定

行事名	開催年月日	主催団体等	場所
Symposium on the Design of Water Resources Projects with Inadeguate Data	昭和48年 6月4日～9日	UNESCO, WMO, IAHS	スペイン (Madrid)
メゾ気象に関するシンポジウム	〃 6月8日～9日	気象学会関西支部	京都大学楽友会館
山の気象シンポジウム	〃 6月23日	気象学会	気象庁第一会議室
第2回レーザー・レーダー（ライダー）シンポジウム	〃 7月24日～25日	気象学会	ホテルドリームランド
大気電気研究会	〃 7月5日～6日		北海道大学理学部
第7回夏期大学「新しい気象学」教室	〃 7月30日～8月2日	気象学会	気象庁講堂
国際地球電磁気学会・超高層物理学協会1973年学術総会	〃 9月9日～21日	日本学術会議	京都国際会議場
Nucleation Symposium	〃 9月23日～29日	国際雲物理委員会	ソ連 (Leningrad)
International Conference on Weather Modification	〃 10月1日～7日	WMO	ソ連 (Tashkennt)
秋季大会	〃 10月29日～31日	気象学会	仙台市